河合 九条の会だより

日本国憲法

第二章 戦争の放棄

第九条 日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

若者への願い

勝ってくるぞと勇ましく
誓って故郷（くに）を出たからは手柄立てずに死なれよか
進軍ラッパを聞くたびに
瞼（まぶた）に浮かぶ旗の波

満州事変から日中戦争へ戦争が広がる時期に戦意高揚の目的で東京日日新聞が公募した軍歌の入選作「露営の歌」の一番です。藪井喜一郎（京都市役所職員35歳）が入賞し、古関裕而作曲、歌手は伊藤久男などで広く親しまれ特に「勝ってくるぞと…」と言うフレーズは今でも耳にします。

入選するだけあって戦場に赴く青年に「何のために命を棄てるのか」「誰のために命を棄てるのか」「手柄とは敵兵を殺すことなのか」考えるひまを与えず畳みかけ人間性を高揚感で消していきます。

この歌は一番から五番までありますが「命」「死」と言う言葉が繰り返し使われています。

「明日の命を誰が知る」（二番）／夢に出てきた父上に「死んで還れ」と励まされ（三番）／笑って死んだ戦友が（四番）／東洋平和のためならばなんの命が惜しかろう（五番）などです。

ラジオも新聞も大本営の偽（にせ）の戦果を流し続け、画家や音楽家、芸能人まで動員して国民の戦意高揚を図りました。そんな狂騒の中で若者の死が美化され戦場へと駆り立てられていきました。その国策の誤りを国民が知ったのは敗戦後です。

戦前の日本は、国家が主人で国民は臣民（家来）でした。そんな上下関係が敗戦で逆転し、私たちは初めて、公に、民主主義を手にしました。邦人三百万人を含む三千万人の命が犠牲になったことを忘れるわけにはいきません。

安倍首相が共著「国を守る決意」で若者に血を流す決意を促していますが、戦前、国が人間を消耗品扱いした思想と重なります。若い人が憲法を変える前に「誰のために命を棄てるのか、何のために命を棄てるのか、命を棄てる価値があるのか」よくよく考えてほしいのです。これが若い人への私の願いです。

河合九条の会　事務局　河合町中山台1－13－2　高桑方
世話人　足立安晧　大辻亜矢子　大野まゆみ　北田裕子　北田喜國　木村由美子　高桑次郎　中村康子　本千加子

戦死した父のこと

河合九条の会の世話人のお一人から「戦死なさった貴方のお父様の事を書いてください」と依頼された。依頼されて父の事を調べたが、父が上海野戦病院で亡くなったという事以外何も知らない事を改めて思い知った。何歳で死んだのかも知らなかった。今になって今年の五月に亡くなった母に、もっと父の事を聞いておくべきだったと後悔している。唯一父の死の状況は母の遺品に残された厚生省援護局からの手書きの文書ただ一つで、次のような内容である。

死亡証書

第六十八師団通信隊第二中隊

陸軍　足立　貫一

右昭和二十年八月十三日中華民国湖南省衡陽県柏ボ　ニ於テ左前膊骨折貫通銃創ヲ受傷シ爾後八月十八日黄茶嶺第六十八師団野戦病院ヘ八月三十一日長沙第百八十四兵站病院ヘ九月十日武昌第百五十九兵站病院南分病棟ヘ九月二十七日武昌第百八十三兵站病院ヘ九月三十日「マラリア」（三日熱）ヲ兼発シ十月九日九江第百七十七兵站病院ヘ十二月十八日上海第百七十五兵站病院ヘ昭和二十一年一月二十七日栄養失調症ヲ兼発シ一月二十九日「アメーバ赤痢兼マラリア」（三日熱）兼左前膊骨折貫通銃創ニ展症シ三月六日上海第百五十七兵站病院ヘ入院加療中ノ處遂ニ「アメーバ性赤痢兼マラリア」（三日熱）兼左前膊骨折貫通銃創（戦病）ニ由リ本日午前八時三十分死亡ス

昭和二十一年三月二十八日

上海第百五十七兵站病院長　関口利一

父が負傷した湖南省が何処なのか今回初めて知った。省都が長沙市で中国の南方の省である。日本軍がこんな南まで侵攻していたことがわかった。しかしこんな遠くで終戦間際に負傷し、上海までたどり着いて後、もう一歩で日本に帰れるという場所まで来ながら終戦後半年程で亡くなった。残念でならなかったと思う。父の中国からのハガキが二通程残されているがその二通ともに「安皓は元気に育っているか」と私を気にしている様子が書かれていた。親類が出征祝いで集まった時の写真に記載されている日付から類推すると出征は昭和十九年六月一日、丁度私の満一歳の誕生日の一日前だったことが分かる。それから二年足らずで亡くなった事になる、三十四歳だった。父は第二国民兵で本来なら徴兵されることは無かったが戦況の悪化による根こそぎ動員により徴兵の対象となってしまった。父の遺品のスクラップブックから想像すると父は大阪高島屋の呉服売り場に勤めて居たと思われる。

今次大戦で戦死された方の多くが南方で誰にも看取られずに餓死されたのを考えると、少なくとも病院で看取られて亡くなったのだから幸せだったといえるかも知れない。病院で亡くなったはずであったが母の言うには骨が二度かえって来て、一度目は石ころが入っていたとの事だ。二度目に帰ってきた骨箱に人骨らしきものが入っていたらしい。後ほどどなたかのお話で上海病院の庭先では毎日沢山の遺体が焼かれていて混乱していたと聞いた。敗戦の中、敵地での遺体処理は満足には出来なかったようだ。

母は終戦後すぐに兵庫県氷上郡の父の兄の家に引き取られたが当時の食糧事情の悪化から居辛い思いをしたらしい。しかし父の母、私にとっての祖母は母と私の為にこっそり食べ物を分けてくれたと後々繰り返し母が私に話してくれた。母は祖母を「毎日欠かさず新聞を読んでおられた」と本当に尊敬していたようだ。その後そこが居辛くなり母の実家がある大阪に戻った。母は私を大学に入れるため懸命に働いた。母を思うにつけ戦争は終わった後も人々に辛い思いをさせるもので二度としてはならないとつくづく思う。　足立安皓

タクシー運転手

お昼に急に思い立って東山魁夷展を観に行ったのは九月半ばの事だった。京都駅のタクシー乗り場は長蛇の列。一瞬やばいと思ったけれどタクシーも列をなして乗り場に進んでいる。一分もしないうちに順番がきたのは個人タクシーだった。運転手は五十代後半位元気のいい方だった。国立近代美術館までとお願いすると、「さあ、どの道を行くかですわ」と言いながら困った様子。その日はお彼岸であり、イベントも沢山あってものすごく混んでいる。ここでもやばいと思ったけれど運転手は携帯で情報を見たりして道を選び、車線をうまく変えながら車を走らせくれた。広い御池通りに出ると、運転手は「この通りは戦後できた道です」と言って深刻な顔。私は「そう、この道の両側にぎっしりと家が建っていたんですよね。私の家は堀川通りですが、強制疎開に遭ったんです」等と話した。運転手はこのお池通りで強制疎開に遭った人を乗せた事があって、そのお客さんの話を聞かせてくれた。「赤紙一枚で戦争にとられた事をよく聞くけれど、強制疎開は紙一枚で一週間のうちに家を出て行けと言われ、家を壊された。赤紙と同じくらい強制疎開はひどい事だ。家を追い出されたまま何の手助けも補償もなかった」と。運転手は心底腹を立て興奮気味だ。運転手は話を続ける。「親父は歯が無いんですわ。兵隊で思い切りたたかれて・・・。今の政府は勝手なやり方で戦争が出来るようにしている。数の力で物事は進んでいくし、学生や若い人達も保守が多くなっている。本当にどうしたらいいんやろ」と私たちに尋ねるでもなく自分にも問いかけている。私たちは「官邸前のデモはそれなりに効果があると思いますけど。私たちは十年ほど前に地元で『九条の会』を立ち上げ微力ながら活動しています」と話した。運転手は「それは素晴らしい事をしてますね」と感心してくれた。彼は「私も日本国憲法を読み始めました。よく出来ていますね」と見慣れたポケットサイズの憲法の本を出してきて「ここまで読みました」と栞を挟んだページを開けて示してくれた。「憲法は本当にいい事が書いてある」「素晴らしい」「涙が出るくらいです」「あの時の人々の苦しみから生まれた憲法ですね」と私たちは意気投合。憲法の本を身近において寸暇を惜しみ勉強されている事に思わず賞賛の声を上げた。そのうち車は丸太町通りを東へ、京都大学の熊野寮に差し掛かった。彼は、「ここにいた京大生の取り調べに警視庁がやってきた事があって、丸太町通りの南側にずらりと車が並んでいるのを見ました。何台もですよ」と強調して、憤懣やる方ないと声を荒げながら話してくれた。随分話が弾んで車は進んでいく。ふと、どのくらい走ったのかメーターに目をやったのを運転手は見過ごさなかったのか「お客さん２０００円でいいです。今日は気分がいい、いい仕事をさせてもらった」と言ってすでに２２００円になっていたメーターをガチャンと倒してハンドルを握り直し軽快に走る。私たちの本来の目的の美術鑑賞にはぎりぎりの時間だった事を忘れてはいない。私の好きな疎水の端を走って、着いた美術館の前は案外空いていた。２０００円では申し訳ないと３００円を差し出したが「２０００円です」と言ってそれ以上は受け取ってくれなかった。いまどき珍しい人に出会ったものだと感心しながらお礼を言う間もなく次のお客さんが「いいですか」とやってきた。入れ替わりのお客さんを乗せて彼の車はさっと北の方へ走り去っていった。

因みに御池通りなど強制疎開された道は「負の遺産」と言われている。

北田裕子

「コスタリカの奇跡」

映画鑑賞会のお知らせ

日　時　２０１９年２月２２日（金）
　　午後２時（開場１時半）
場　所　河合町　まほろばホール
　　０７４５・７２・１１００
入場料　１０００円（１２月より販売）
お問合せ　０７４５・７２・０６３２

高桑

雨が上がるまで（6）

本　千加子

大晦日になった。抗がん剤投与後正月には哲夫を一度家に連れて帰りたいと思っていたが、どうやら無理のようだ。微熱が続いていて、るだけでなく鼻からチューブを入れ尿管も外せない状態のため外泊は考えられなかった。

毎年二人の嫁と一緒に作って来たおせち料理も哲夫が食べられないので作らないことにした。次男夫婦が章子の分のおせち料理を届けてくれた。嫁の心遣いがとても嬉しかった。除に行き、帰りに章子の分のおせち料理を届

章子は哲夫を早く休ませようと看護師に頼んで八時過ぎに帰宅したが、哲夫は年越しそばを食べられないと恨めしそうだった。年末年始の夜勤担当に決まっていた看護師が「私が夜勤だから一緒に過ごしましょう」と哲夫に明るく言ってくれてありがたかった。

帰宅後、年末なのに仕事で遅くなって帰って来た長男と嫁と一緒にカップ蕎麦を食べた。仕事と気苦労でしんどそうだったが、「今できることを精いっぱいやってあげよう。あなたも少しゆっくりして」と優しい言葉をかけてくれる。「一時的に良くなってもそろそろ別れの時が近づいているのではないか」と長男も心の中で呟いているようだった。

十二月下旬のMRIの検査の後、広田医師から腫瘍が消えたという報告と共に今後リハビリ病院か療養型施設への転院を仄めかされた。病院の入院期間は三カ月というのが常識だ。抗がん剤が効いて腫瘍が消えたことで、とりあえず急性期病院の役割は終えたということだろう。三カ月を過ぎると病院に収益が入らないので心苦しいが早く転院して欲しいのだと広田医師は話した。転院に当たって「胃ろうの手術を急ぎましょう」とのことだった。鼻からのチューブは患者が睡眠時に無意識に抜いたり感染症の恐れがあるのでこの状態では胃ろうをするのがベストだという。

年が明けてから哲夫にその話をしたら胃に穴を開けるのは嫌だと言った。章子は以前認知症が悪化して食べられなくなって特養から療養型病院に移された実母に胃ろうの手術を勧められ、承諾した経験があった。母親は一滴の水も飲まないで昏睡状態のまま一年半生き続けた。「胃ろうにしないと早く亡くなりますよ」という医師の言葉に動揺して承諾したことを今でも悔やんでいる。

広田医師は、嚥下障害が脳の機能低下から来ているので、元には戻らないと考えているようだ。しかし、ある本に「喋ることができる人は食べることが出来るようになる」と載っていた。哲夫は一時的に呂律が回らなくなっていたけれど、だんだん治ってきて声もかなり出せるようになってきていたので、胃ろうが本当に必要だとは思えなかった。だが、転院先の施設や病院が鼻チューブの患者は両手を拘束したりしなければならず、胃ろうにすれば様々な手間が省けるので胃ろうの患者なら受け入れてくれ易いようだった。医師は躊躇する章子に再度胃ろう造設の決断を促した。

章子はお世話になった医師に刃向えなくて「食べられるようになったら胃ろうは外せるから」と哲夫を説得した。その後、「食べるリハビリをして頂けませんでしょうか」章子は広田医師に直訴した。胃ろうはするけれど、嚥下機能が戻るかどうかやれるだけのことをしてやりたいと思った。

「そうですよね。一生口から食べられないで生きるなんて生き地獄ですよね。言語療法士さんにリハビリをして貰いましょう」

医師も頷いた。それから女性の言語療法士が度々やってきて喉の周辺のマッサージや発音の訓練をして、男性の理学療法士が手足の上げ下げやマッサージをした。

長期の抗がん剤治療の間、寝たきり状態になり全身の筋肉が強張ってしまっていたけれど、哲夫はよく喋るようになり手も震えが止まって動くようになってきた。

「これはかなり良いですよ。来週から少しお茶や溶けるお菓子を食べてみましょう」

言語療法士さんもうれしそうだった。

次の週になり、言語療法士の見守る中で哲夫の舌の上にラムネ菓子を置いた。

「味がする？」

「うん」

章子の問いに哲夫は嬉しそうに頷いた。とろみを附けたお茶もスプーンで一匙飲ませた。このまま食べられるようになれば、胃ろうは不要になるだろうと思った。

（つづく）